

英米文化の背景 「英米人の迷信・俗信」考 (10) Ⅲ 恋と結婚

—その5 披露宴・ウェディング・ケーキ・ハネムーン—

藤高 邦宏

倉敷芸術科学大学国際教養学部

(2001年9月28日 受理)

はじめに

いずれの文化においても、古来、結婚式のあとには結婚披露宴（いわゆる結婚披露式）を行うのが一般的である。この披露宴には、厳かさとともに華やかさの二つの側面があるようである。この披露宴で人々の注目の的となる中心的存在は、やはりまず一番は花嫁であり、それに次いで花嫁に結びつきがあるとされるウェディング・ケーキであろう。その結びつきとは、ウェディング・ケーキは花嫁が子宝に恵まれるようにとの願いが込められたものであるという点である。その点から、ウェディング・ケーキは参会者はもちろんのこと、関係者のすべてに食べてもらうことが肝要とされる伝統がある。

古い時代、特にヴィクトリア朝時代（19世紀）以前には、新婦の実家での披露宴が終わった後、新婚夫婦は付添人や参会者に賑やかに囃したてられて寝室に送られ、そこでストッキング投げによる古い遊戯が興じられたとされる。さらにずっと古い時代には、場合によっては、新婚夫婦が花で飾られた新床いんどこに就く前に、牧師による新床の祝福がなされたとも言われる。こうした古い習慣は今日ではまず見られることはなく、昨今では一般に、新婚夫婦は披露宴の終わらぬうちにハネムーンに出かける場合が多いようである。

今号では、披露宴とウェディング・ケーキ、またかつての時代の新婚夫妻の初夜、そして今では一般的になっているハネムーン等について、それらに関する諸習慣とそれに纏わる種々の迷信・俗信を取り上げ、さらにその文芸用例をも挙げつつ考察を試みたい。

1 披露宴 (wedding reception)

大方の場合、結婚式そのものは手際よくきわめて短時間のうちに終了されるが、むしろ大変なのは、それに続く披露宴であろう。その規模と内容はさまざまであるが、いずれにせよなかなか苦勞のある催しごとである。通常、披露宴は新婦の実家で主催され、経費も新婦の親が負担する。披露宴にはしばしば多額の費用がかかることになるが、「この費用を新婦の親が負担するのは、往時、新婦の父親が新郎方の家に持参金 (marriage portion) を届けた風習の名残である」¹⁾との考え方がある。

昨今の披露宴の全体的な雰囲気は、日本の一般的な場合とは随分異なり、席について堅苦しいスピーチをしたりはせず、家中を賑やかに飾り、自由で楽しい雰囲気のカクテル・パーティ風に行われる場合が多いようである。(また、前述のように、新郎新婦はたいていの場合、披露宴の終わらぬうちにハネムーンに出かけてしまうのである。)

披露宴での俗信には次のようなものがある。

☆「披露宴の席で、未婚女性が花嫁からチーズを一切れもらうと、一座の中ではその女性が次に結婚することになる」と言われる。これはスコットランド低地地方の俗信である。

☆「披露宴の席で新婚カップルに贈り物をするのがよくある。贈り物の品物にはいろいろな物があるが、ナイフだけは不吉とされるので避けるべき」とされる。披露宴で新婚カップルに贈り物をするという習慣の起源については定かでないが、古代には「豊饒」のシンボルとして果物を贈った風習があったとされ、それが起源とも見なされるようである²⁾。

2 ウェディング・ケーキ (wedding cake; bride ('s) cake)

披露宴で最も人々の注目を引く存在は言うまでもなく花嫁であるが、次いで注目を引くと思われるのが、豪華な飾りつけを施したウェディング・ケーキである。このウェディング・ケーキは別名ブライド・ケーキ (bride ('s) cake) と呼ばれ、やはり「花嫁のケーキ」なのである。こうしてみると、[前号でも既述のように]やはり結婚の日々に人々の注目を引く中心的存在となるのは花嫁及び花嫁に結びつきのあるものであるということに、改めて納得がいくであろう。(因みに、花婿のケーキ (groom's cake) と呼ばれるものもあるにはあるが、それは手のひらに入りそうな小さな普通のケーキで、目立たず誰も気がつかないようなケーキである。)

ウェディング・ケーキの起源は古代ローマの貴族の結婚式にあるとされる。この式は大神官が十人の証人を前に執り行われ、その際新郎新婦が塩、水、小麦粉でできた菓子とともに食した。そしてこの式を経た結婚で生まれた子供だけが、高位の聖職につくことができた³⁾。

古代ローマ時代以来、結婚式、特に披露式には欠かせないものとしてのウェディング・ケーキは「豊饒と幸運を象徴し」⁴⁾、それを食べた者全員に幸運をもたらすとされる。ウェディング・ケーキは、人の一生に満ち溢れる「善なるもの」を表すように、できる限り豪華に作られねばならず、見事なケーキが披露されることは極めて肝要なこととされてきた。

このケーキはもともと小麦で作った菓子を食べた習慣から発して、それを焼いて花嫁に投げて「子宝祈願」としたものであるが、その残った菓子を集め合わせて、それにアーモンドをすりつぶしたものや砂糖を塗り、段重ね形状のケーキを作り出したようである⁵⁾。

このケーキの出来具合が新婚夫妻の将来の運命を決めるとさえ考えられたりもするが、それはやはり「ケーキの豊かさこそは多産を象徴する」⁶⁾との考え方に端を発するゆえであろう。まさに「ウェディング・ケーキは、子宝に恵まれる結婚を象徴し、参会の客たちによって花嫁にケーキ (bride ('s) cake) が運ばれた伝統に由来する」⁷⁾ようである。

ウェディング・ケーキに関する俗信には次のようなものが見られる。

☆「花嫁が自分の結婚式のケーキを作るのを手伝うのは、この上なく縁起が悪い。」

☆「結婚式当日より前に、花嫁にウェディング・ケーキの味見をさせてはならない。」

また、披露式の中で人々の注目を集める事柄の一つに、新婚夫妻が二人で力を合わせて行う初仕事としてのケーキ・カットの儀式がある。

☆「花嫁花婿は協力してケーキの最初の一切れを切ることが必要である。そうしなければ夫婦に子供が誕生しなくなる恐れがある」とされる。なお、このケーキ・カットの共同作業については、「花嫁と花婿は将来すべての所有物を共有する証として、ケーキの最初の一切れを協力して切ることが必ずや必要である」⁸⁾との言い伝えがある。

☆「ケーキカットでは、花嫁は花婿の左手の助けを得てそれをなすべき」⁹⁾とされる。

切られたケーキに関しては下記のような信がある。

☆今では廃れた習慣であるが、「ケーキは花嫁の頭の上に布を広げておいて崩され、細かく碎けるほど縁起がよい」とされた。客たちはさらにそれを粉々に砕こうとした。そして「砕かれたケーキの断片は人々に幸運をもたらすもの」とされた¹⁰⁾。

☆「花嫁は夫が彼女に対していつまでも誠実である保証として、ケーキの最初の一切れを大切にしておく」習慣がある。

☆「段状に作られたケーキの1段を、生まれてくる子供の洗礼式用のケーキに使うためにとっておくと、多くの子供に恵まれる保証となる」とも言われる。

☆「披露宴の出席者はすべて、ケーキの小片を食しなければならない。これを拒否、辞退することは幸せな二人にとって極めて悪い前兆となる。」

☆「出席できなかった者に対しても、幸運を分かち合ってもらうために、小箱に入れたケーキが一切れずつ贈られる」のが一般的である。

また、ウェディング・ケーキは、独身者に未来の伴侶の夢を見せてくれるための呪いにも用いられる。

☆「ケーキの一切れを花嫁の結婚指輪に3回(9回とも)くぐらせ、それを枕の下に置いて寝ると、未婚者は生涯の伴侶の夢を見られる」¹¹⁾と言われる。

☆「未婚の女性は、ケーキの一切れを持ち帰り、それを枕の下に入れて寝ると、未来の夫の姿を夢に見ることができる」¹²⁾と言われる。

3 廃れた寝室送りとストッキング投げ

今日では花嫁花婿の寝室送りの儀式とストッキング投げの遊技は、まず見られなくなっ

ている。一説では、ヴィクトリア朝（19世紀）のある時期まではこの習慣があったとされる¹³⁾。恐らくは結婚式の後、花嫁花婿が披露宴もそこそこにハネムーンに出かけるようになってから、この習慣は廃れたものと思われる。かつては、披露宴が終わると、花嫁は花嫁付添人によって、花婿もまた花婿付添人によって、あるいは場合によっては出席者全員によって花嫁花婿が賑やかに囃し立てられて寝室に運び込まれたと言われる。そこで周りの人々は二人に卑猥な言葉を浴びせ、二人をひやかし大騒ぎをしたものである。その際、両者の付添人たちはベッドのそれぞれの側に別れて腰掛けて、新婚夫妻のストッキング（靴下）を肩越しに投げ飛ばし合い、その結果次に誰が結婚するかを占うゲームを賑やかに行ったとされる。

☆「ストッキング投げの占いで、花婿のストッキングが体に当たったり引っかかったりした未婚女性は、あるいは花嫁のそれが体に当たったり引っかかったりした未婚男性は、間もなく結婚することになるしるし¹⁴⁾とされた。

このストッキング投げの占いの習慣が、姿を変えて残っているのが花嫁のブーケ（花束）投げの習慣であろうと言われている¹⁵⁾。これに関しては、

☆「投げられたブーケを掴んだ未婚女性は、次に結婚の幸福を手にする」と言われる。

花嫁が花束を投げる機会としては、式後の教会前での祝福の際や、披露宴の最中とかさまざまであるが、最も一般的なのはハネムーンに出かける際に投げる場合であろう。そのとき、華やかさのためにかつ受け取る者への公平さのために、階段の上など、やや高い所から投げる場合が多いようである。

4 昔の新婚者の初夜

ハネムーンに出かける習慣がまだなかったとされるヴィクトリア朝時代以前には、新婚者は一般に披露式の行われた新婦の実家等で新婚の夜を過ごした。新婚の二人が迎える夜については次のような俗信がある。

☆「花嫁付添人は、花嫁のストッキングを初夜のベッドの上に十字形に置いておかねばならない。もしそうしなければ、新夫妻には子供が生まれない。」これは特に Yorkshire の Leeds 地方で言われるものである¹⁶⁾。

☆Wales では、「花嫁は衣装に使われたピンを全部取り出して左肩越しに投げるか、暖炉の中に投げ入れるかしなければ、彼女の結婚生活は不運なものとなる¹⁷⁾と言われる。

次は二人が親の家ではなく別の場所、例えば新居等で初夜を迎える場合の信である。

☆「新婚初夜には、玄関の施錠は夫がすべきものとされる。妻が施錠すると朝までに夫婦喧嘩が起きる¹⁸⁾と言われる。因みに、この信は今日でもハネムーンに出かけた際に、宿室のドアの施錠について適用されたりもするようである。

古い時代には、新婚者の初夜については二つの側面があり、一つには「お祭り騒ぎ」という側面があるが、同時に一方では「極めて厳粛な儀式」という側面があったようであ

る。前者については、寝室送りやストッキング投げ等がそれに相当するであろう。

後者については、例えば、新床 (bridal bed) を祝福の花で飾り、清めの儀式が行われたこと等が挙げられるであろう。これに関して、T. F. T. Dyer は *Folklore of Shakespeare* の中で、新床を花で飾る習慣について記述している。Dyer は、*Hamlet* の中で Queen が哀れな Ophelia の亡骸に花を撒きながら語る次の言葉を引用している¹⁹⁾。

I hop'd thou should'st have been my Hamlet's wife :

I thought thy bride-bed to have deck'd, sweet maid, ...

(わたくしはあなたがハムレットの妻になっておくれだったらと思っていたのに。

あなたの新床を花で飾ってあげようと思っていましたのに、ねえ、あなた、・・・)

また、新床を祝福した習慣については、Dyer は同書の中で、「カトリック教の時代には、新床が祝福されるまでは、新婚夫妻は床に就くことはあり得なかったし、これは結婚の儀式のうちでは最も大切なことの一つだと見なされた」と述べており、A *Midsummer Night's Dream* の Oberon の言葉を引用している²⁰⁾。

Now, until the break of day,

Through this house each fairy stray.

To the best bride-bed will we,

Which by us shall blessed be ;

And the issue there create

Ever shall be fortunate.

(さあ、夜が明けるまで、

妖精はみな館中を歩き回るがよいぞ。

わたしたちは最高の新床になるように

祝福してあげるつもりだ。

そこでもうけられる後継ぎが

いつまでも幸運であるように。)

またさらに、同箇所でも Dyer は、Steevens が挙げるこの習慣の例証としての Geoffrey Chaucer, *Canterbury Tales* の “The Merchant's Tale” からの引用 — “And when the bed was with the preest yblessed” (そして、床が牧師によって祝福されたとき) — を紹介している²¹⁾。これはこの話の中の主人公である老騎士が若い花嫁を娶った夜、その新床を牧師によって祝福してもらったという当時の大切な習慣についての描写である。

この項の終わりに、新婚者の初夜に関する実に非科学的な古い俗信を挙げておきたい。

☆「新婚初夜に、夫婦のどちらであれ先に寝入る者が先に死ぬ。」²²⁾これは Yorkshire での俗信であるが、同地方では、「新婚初夜に、花嫁が先に寝入れば、必ずや花嫁が先に死ぬことになる」²³⁾と言われる。

このいわれは定かではないが、夫婦の間で大切に過ごすべきときに、一方がもう一方に対して「先に寝入る」という不誠実な態度を見せれば、神はその者をお許しにならず、やがてはその者の命から先に召し上げることになる、という解釈によるものであろうか。この解釈が成り立つとすれば、これは今後の結婚生活の中での夫婦間の不誠実の始まりを戒めるための信である、と言えるかもしれない。

5 ハネムーン (honeymoon)

現在では、ハネムーンという言葉は「新婚旅行」の意味で用いられる。前述のとおり、かつては、このハネムーンに出かける習慣はなかったとされる。ハネムーンという言葉の語源及びその意味について、Kircup 氏は次のように記述している。

In the old days, the honeymoon was shared with all the guests. The bride and bridegroom did not go away, but stayed at the bride's father's house, where there was much merrymaking, and plenty of bawdy jokes about the first wedding-night. The wedding wine in those early times was made from fermented honey, and the festivities lasted until the next new moon, and that is the origin of the word "honeymoon."²⁴⁾

(昔は、ハネムーンはすべての客とともに過ごされた。花嫁花婿は旅行には出ず、花嫁の実家にとどまった。そこでは、大いに酒盛りがなされ、新婚初夜についての卑猥な悪ふざけの言動が大いに見られた。その当時の結婚式のワインは蜂蜜を発酵させて作られていた。そして、そのお祭り騒ぎは次の新月まで続いた。従ってそれが「ハネムーン」という語の起源なのである。)

これは現代では想像しがたいほどの、大昔の悠長な時代の習慣であったらうと思われるが、時代を経て、新婚夫妻が結婚を記念し生涯の思い出とするため「新婚旅行」に出かける習慣が一般に広まってからは、「ハネムーン」が「新婚旅行」の意となってしまったようである。

(因みに、“honeymoon”という語の起こりの理由について、Peter Lorie は「それは非常に簡単な理由で、北欧では、結婚後、月 (moon) が丸一周期を経るまで、新婚夫妻やすべての客、その他関係者たちが、媚薬、催淫剤とされる蜂蜜 (honey) を飲むことになっていたからである」²⁵⁾と述べている。蜂蜜—この場合には、蜂蜜そのものであって、その発酵酒ではないとされる—は今日では栄養剤であるが、かつては新婚夫婦にとってはもちろんのこと、人々の間では媚薬及び催淫剤と見なされたようである。)

ところで、蜂蜜の件で、これを作り出すミツバチに関して次の俗信がある。

☆「家人の結婚式は、ミツバチたちに告げてやらねば死んでしまう」²⁷⁾と言われる。(因みに、ミツバチについては、家人の結婚についてのみならず、もう一つの大切なこと、つまり家人の葬式についても知らせてやらねばならないとされる²⁸⁾。)

ハネムーンに関する俗信として次のようなことが挙げられる。

☆「新婚夫妻は出席している人々に、ハネムーンの行き先を知られないように留意する。」

日本の結婚披露宴などでは、司会者が二人のハネムーンの目的地を晴れがましく公表して、参会者一同の拍手を得たりする場合も見られるが、欧米では、敢えてそれをしない伝統がある。その理由の一つとして、かつての頃、親が認めない結婚の場合に二人が駆け落ちをしたりしたとき、立腹した親の追跡の手を逃れるために行先を明かさなかった、ということも挙げられるようである。しかしながら今日ではその理由は、もっぱら友人や同僚の悪質なジョークや悪戯をかわすためであろうと言われる²⁹⁾。結局、二人の行先についてケチをつけられたり、冷やかしを受けたりするのを避けるためであろう。

この伝統的習慣が今なお残るのは、二人がどこに出かけるにせよ、二人だけの旅は二人だけの秘めた楽しみごととしてとっておかれるべきもの、ということなのではないであろうか。

それでも、彼らが新婚旅行に出るために自動車に乗ろうとすると、その車体には友人たちがペンキで、“Just married!”(新婚ほやほや!)の類の悪戯書きをしてあったり、後部バンパーには幸運の古靴を吊したり、賑やかな音をたてるように空き缶等を紐や鎖で繋ぎとめてあったりするものである。こうした事柄も、特に悪質なものでなければ、縁起担ぎのユーモアであり、また何よりも祝福として受け止められるべきものであろう。

[次号「花嫁の敷居越え・新婚生活・夫婦間での主導権・結婚記念日」等に続く。]

Acknowledgements :

当稿の執筆にあたり、多くの貴重なご教示をいただいた Amy Chavez 女史(元、中国短期大学講師)に心より感謝申し上げます。

Notes :

1) “Weddings,” *The Customs and Ceremonies of Britain*, ed. Charles Kightly (London: Thames and Hudson, 1986) 230 (L)-(R).

The far greater expense of the subsequent wedding reception is conventionally borne by the bride's father, a memory of the dowry of MARRIAGE PORTION he once paid the groom's family.

2) “Wedding,” *Cassell Dictionary of Superstitions*, ed. David Pickering (London: Cassell, 1995) 282 (L).

The giving of the presents to a newly married couple at their reception has its roots in the ancient custom of presenting them with fruit as a symbol of fertility.

3) “Bride; Bride cake,” *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*, rev. Ivor H. Evans, Centenary ed. 6th imp.

- (1870, ed. Ebenezer Cobham Brewer; London: Cassell, 1978) 151.
- 4) "Wedding," (E-cake) *Dictionary of Symbols and Imagery*, ed. Ad de Vries (Amsterdam: North-Holland, 1974) 496.
 "Wedding cake": (it) symbolizes fertility and luck; ...
- 5) Tad Tuleja, *Curious Customs* (New York: Harmony Books, 1987) 62-63.
- 6) *Folklore, Myths and Legends of Britain*, ed. Reader's Digest Assn., 2nd ed. (London: Reader's Digest Assn, 1997) 59 (L).
- 7) Peter Lorie, *Superstitions* (New York: Simon & Schuster, 1992) 215.
 ... the bride was brought "bride cakes" by guests as symbols of fertile union.
- 8) "Wedding cake," Pickering, 282.
 It is essential that the bride and groom cut the first slice of cake as a sign that they will share all their possessions in the future. Should they fail to do so they run the risk of being unable to bear children.
- 9) "Wedding cake," *Encyclopaedia of Superstitions*, ed. E. & M. A. Radford (New York: Philosophical Lib., 1949; New York: Greenwood, 1969) 254.
 It is, of course, a fact that all brides in all counties, cut their own cake—helped by the left hand of the bridegroom.
- 10) Reader's Digest Assn, 59 (L).
 ... once the cake was literally broken over the bride's head; guests then scrambled for fragments, which would bring good luck.
- 11) "Wedding cake," Radford, 254.
 A slice of wedding cake, thrice drawn through the bride's wedding ring, and laid under the head of an unmarried man or woman, will make him or her dream of future wife or husband.
- 12) James Kircup, *British Traditions and Superstitions* (Tokyo: Asahi Press, 1975) 27.
 Unmarried girls put this [a piece of wedding cake] under their pillows when they go to bed, believing it will help them to dream about their future husband.
- 13) Reader's Digest Assn, 59 (R).
 Until Victorian times, it was common practice for the bride and groom to be publicly assisted to bed, the bride by her bridesmaids and the groom by the groomsmen. The occasion developed into a huge frolic with much hilarity and ribaldry. Bridesmaids and groomsmen sat on either side of the bed and threw the newlyweds' stockings over their shoulders; if a girl hit the groom with a stocking or a man the bride, this was a sign that he or she would soon be married.
- 14) Reader's Digest Assn, 59 (R). [The same as Note of 13) above.]
- 15) Reader's Digest Assn, 59 (R).
 From this [the custom of the stocking-toss game] derives the modern custom of the bride throwing her bouquet—the bridesmaid who catches it is soon to be married.
- 16) "Wedding," Radford, 253 (R).
- 17) "Wedding," Radford, 254.
- 18) "Honeymoon," Pickering, 135. / "Married life," Radford, 169.
 [Pickering]... when retiring to bed on the wedding night it should be the groom who locks the front door—if the wife does it, the couple will argue before morning.
- 19) T. F. Thiselton Dyer, *Folklore of Shakespeare* (1883; Williamstown, MA: Corner House, 1983) 355.
- 20) Dyer, 356.
- 21) Dyer, 356.
- 22) "Marriage," Radford, 169 (L).
 Whichever goes to sleep first on the marriage night will be the first to die. (Yorkshire)
- 23) "Bride," Radford, 46 (R).
 If a bride goes to sleep first on the marriage night, she will be sure to die first. (Yorkshire)

24) Kircup, 29.

25) Lorie, 224.

... but then why call it a honeymoon? Very simply because during the period of one whole moon following a marriage, all the guests, married or otherwise were to drink honey, an aphrodisiac in the northern part of Europe.

26) "Bride," Radford, 46-47.

27) "Bees take part in funeral / wedding," (1869) *A Dictionary of Superstitions*, ed. Iona Opie & Moira Tatem (1989 ; Oxford : Oxford UP., 1990) 20 (L).

28) "Weddings," Kightly, 230 (R).

... concealing the honeymoon destination, once designed to foil the irate parents of runaways but now to balk pranksters,...

Speculation Concerning Superstitions in the Cultural
Background of the English & The Americans—(10)
III LOVE AND MARRIAGE Part 5 :
On the Customs and Superstitions of Wedding Receptions,
Wedding Cakes, the Ancient Style of Newlyweds'
First Night and the New Fashion of Their Honeymoon Travels

Kunihiro FUJITAKA

Faculty of the College of Liberal Arts and Science for International Studies,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 28, 2001)

After a wedding ceremony is finished, it is customary to hold a wedding reception, which is usually gorgeous and merry to a great extent. It may be first of all a bride that is paid special attention to by the people present at the reception, and second so may be the wedding cake, which has another name of a bride's cake. Since the ancient time of Rome, wheat from which cakes are made has been regarded as a symbol of fecundity, and that is the reason why a wedding cake is essential in the wedding reception: the wedding cake is expressive of a great wish for a bride to give many births in her married life. It is surely thought very lucky that pieces of the wedding cake should be eaten by all the people present there and otherwise.

Before the Victorian Age, newlyweds had no custom of honeymoon travels. In such old days, newlyweds were accompanied into their bedroom gaily and lively by their attendants, and there they played the stocking-toss game with the newlyweds to tell happy persons' fortune to be married soon. Nowadays, however, this ancient custom has not been seen, while the bride and bridegroom in general go out for their honeymoon travels before the end of their own reception party of wedding. In the connection of the honeymoon travels, the word of 'honeymoon' is said to have come from the ancient custom that newlyweds, their relatives, and other people, sometimes including their good friends, spent happy days drinking wine made from fermented 'honey' till the next new 'moon' day.

In this paper, we will speculate on the customs and various superstitions concerned with wedding receptions, wedding cakes, the ancient style of newlyweds' first night and the new fashion of their honeymoon travels. During this speculation, we would also like to exemplify some practical usages from English literary works.